

# 海外での支援活動を支えるための ボランティアの受け入れと活動の推進



わが国において、海外支援を行う国際協力NGOは数多くあります。組織の大小もさまざまで活動分野も幅広く活動の展開方法も、多様です。たとえば主に海外にスタッフを派遣するNGOがある一方、現地のNGOなどの活動支援に資金や物資、建物などを提供する。ことを中心に活動するNGOもあります。いずれの場合も、これらの活動の活動には国内活動を支えるボランティアの存在が不可欠です。

ここでは、国際協力NGOを支えるボランティアの国内での活動のかかわり方やボランティアの意義などについて紹介します。

特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター (JVC) [東京都台東区]  
<http://www.ngo-jvc.net/>

▼ 広報担当のインターンが小学校の講演に同行



日本国際ボランティアセンター(以下、「JVC」)は、1980年、カンボジアやラオス、ベトナムなどで多くの難民が出た時に、「自分たちで何かできないか」と日本の若者たちが集まったことをきっかけに誕生したNGOである。それぞれの国・地域の資源を活かした地域開発への支援、紛争地や被災地に暮らす人びとに対する医療・栄養などを提供する人道支援の実施、なら

それがJVCの中で独自に活動を展開しており、いくつものNPOがJVCの傘のもとに存在しているような形ともいえる。活動は多彩であり、メンバーたちが集まって、検討し合いながらさまざまな活動を自主的に運営している。たとえば、各国の情勢を学ぶための勉強会や、支援金のもととなる使用済みプリペイドカードや書き損じハガキ、古切手の収集、その国の料理を楽しむ会、会報誌にはさみ込むチームのニュースレターの制作など。

それぞれの国への関心や想い入れを強くもっているメンバーたちだけに、「ボランティアチームには同じ問題意識の人が集まっているので、お互いに話しあえて楽しい」、「自分たちができることを考えるスタイルに最初はとまどったが、今では、自分たちでできる自信が湧いてきた」など、前向きな意見が多い。

## ■ ボランティアの受け入れと今後への抱負

事務ボランティアや国別ボランティアの受け入れについては、毎月3回、東京事務所においてオリエンテーションを行っており、JVCのスタッフが持ち回りで、団体の活動内容やミッションとともに、国内でのボランティアの役割に関する説明を行う。オリエンテーションへの参加者は、「将来NGOの現場で働きたい」「海外の国のために、今、自分ができることを見つけたい」など、さまざまな動機をもってやってくる。

JVCでは、ボランティアを「無償で働く人」ではなく、「自発的意思をもって、責任ある行動をとる人」ととらえている。したがって、そのコーディネートにおいては、一つひとつの作業がどのように国際協力に役立つのかを理解してもらうことを大切にしている。

そして、今後も多くのボランティアが、国内での活動をとおして海外の国や地域の情勢を学び、国際協力の一翼を担う機会を増やしていきたいと考えている。

▶ パレスチナ・チームでの「エスニック料理を楽しむ会」



## ■ 海外スタッフを支えるボランティア

JVCには、7か所の海外事務所に合わせて76名、東京事務所に20名の、計96名のスタッフがいる。支援活動の主役は、あくまでもそれぞれの国の人びとである、とのスタンスから、海外事務所のスタッフの大半は現地の人である。そして、海外事務所と東京事務所との調整役として1~3名の日本人スタッフが派遣されている体制となっている。

これらスタッフの活動を側面から支える存在として、延べ100人ほどのボランティアが日本国内でのさまざまな活動にかかわっている。

上野にあるJVCの東京事務所にはボランティアが集まり、会報誌の発送作業や、パソコンの入力作業、日本国内でのイベントの準備・手伝い、JVCが毎年制作している国際協力カレンダーとポストカードの発送作業などを行っている。集まってくるボランティアは、年齢層や職業等も非常に多様である。

また、広報やカレンダー販売、ホームページの更新、調査研究などを担当する事務スタッフのサポート役として、毎年1年契約のインターンを受け入れており、今年度は8名が活動中である。

こうしたボランティアやインターンたちは、「日本国内で自分たちができる活動をとおして海外の国々の役に立ちたい」という熱い想いを共有している。そして、こうした支援者がいることが、現地スタッフにとっての精神的な支えや励みとなり、相乗効果を生んでいる。

## ■ 7つの国や地域の支援に特化したグループ活動

JVCの国内活動の特色のひとつは、現地プロジェクトを応援する国別のボランティアチームがあることである。1989年に、ラオスの支援に特化したグループが生まれたことがきっかけとなり、現在は、アフリカ、ラオス、カンボジア、タイ、ベトナム、パレスチナ、アフガニスタンの7チームが組織されている。



この「国別ボランティアチーム」は、学生や社会人、シニア、主婦など、さまざまな世代がかかわっている。メンバーの中には、複数のチームで活動している人もいます。

「国別ボランティアチーム」は、それ

▲ 全国から集まる古切手を仕分けするカンボジアチーム

## 海外の国や地域が真に求める支援と 日本でできる支援のマッチングをめざして

ひろせ のりこ  
広瀬 哲子 さん

日本国際ボランティアセンター 広報担当



私自身はもともと、企業で広告関係の仕事をしていました。その当時は、「新製品が出たので、新しいものを買いたまおう」といった、現在とはまったく正反対のことを訴え続けていたのですが、やがて、そうしたことに對して疑問を抱くようになりました。また海外で、特に旅先のアジアの国々で目にする貧困の問題と、それを見ながら何もしない日本での自分に、これでいいのかと考えはじめました。

そんなことがきっかけで、青年海外協力隊に応募しました。協力隊員としてモンゴルに滞在していたとき、穴のあいているセーターを着て馬に乗る遊牧民の姿を見た日本人の観光客から、「穴のあいた服を着ていて可哀相だから、うちにある古着を送ってあげようと思うので、どう送ればいいのか聞いてください」と言われたことがあります。

その観光客は、善意で、「人のために何かをしたい」、「モンゴルのために役に立ちたい」と考えたに違いありません。とても純粋な思いだったので、そのモンゴル人にとっては、穴のあいたセーターを着ることは可哀相なことでも何でもなく、古着を送られる必要などまったくないのです。

この経験を機に、日本人が考える支援と、海外の国や地域が真に求めている支援とのズレに気づくとともに、上手なマッチングが必要であると考えようになりました。支援者やボランティアの純粋な支援の気持ちを、現地の事情に則したより良い形でつなげることが、今の私の使命となっています。

# 特集 国際協力NGOの活動を支えるボランティア



## 医師から高校生まで、さまざまな人びとが支える 医療救援や生活改善のための国際協力

特定非営利活動法人 アムダ [岡山県岡山市]  
<http://www.amda.or.jp/>

岡山県に本部をもつアムダ(以下、「AMDA」とは、「Association of Medical Doctors of Asia」の略称であり、1984年に設立された。アジア、アフリカ、中南米において、戦争・自然災害・貧困等により社会的・経済的に恵まれず、社会から取り残されている人びとへの医療救援や、生活改善のための活動を実施してきた国際協力NGOである。

2001年に岡山県より特定非営利活動法人の認証を受け、国境を超えた相互扶助の精神に基づき、災害や紛争発生時等の医療・保健衛生分野の緊急人道支援を中心とした活動を展開している。

また、2006年には国連経済社会理事会より総合諮問資格が授与された。この資格は日本で4番目となるが、医療ボランティアのNGOとしては唯一である。

### AMDAの活動を支える数多くのボランティア



▲ AMDA事務所内でのDM発送に当たるボランティア

AMDAの事務局には非常勤職員を含めて約20名のスタッフがいるが、「私たちの活動はボランティアがいないと成り立たない」と同団体のボランティアセンター長・小池彰和さんは述べている。AMDA

には、日常的な事務補助を行うボランティアのほか、広報やイベントなどの後方支援を行う「高校生会」や「県支部」など、数多くのボランティアがかかわっている。

日常的な事務補助としては、団体が発行している機関誌やチラシの発送、新聞・雑誌などの報道関連資料の整理、広報用パネルのラミネート加工などがある。さらに、各種イベントの手伝いやフェスティバルでの広報活動などへ、ボランティアの協力を得ている。

技術的な専門性が求められるホームページの作成と更新

▶ 岡山県の国際協力フェスティバルでワークショップを主催する高校生会



は、IT関連分野での技術を有する2人のボランティアが担当している。

また、AMDAには、これまでAMDAの活動にかかわったことのある医師などを中心に、いくつかの県・地域支部が設けられている。各県支部では、メインに取り組む活動を決めていて、神奈川と兵庫の支部ではネパールの病院運営の支援、沖縄支部では中南米での災害時に医師を派遣する事業が中心となっている。さらに、鎌倉にある「鎌倉クラブ」では、年に1回音楽会を開催し、その収益金をホンジュラスでのHIV撲滅活動のために役立てている。

事務局では正確な人数は把握しきれていないが、緊急救援時の医療ボランティアをはじめ、国内においても県・地域支部の支援者や、イベントでの協力者など実に多くの個人やグループがプロジェクトを支えている。

### 高校生たちによる国際協力活動

AMDAの活動を支えるグループの一つ「高校生会」は、1995年の秋に発足した。国際協力に関心をもつ岡山市内の高校生たちが、同年に発生した中国雲南省での災害復興支援として、学校再建へ向けた活動を始めたことが発足のきっかけとなった。

現在では、高校1年生、2年生を中心とした約16名が、学校間の垣根を越えて参加し、自分たちができるプロジェクトを展開しながら、活動にかかわっている。また、支援に必要な資金を集めるために、街頭募金や地域行事への参加、テレビやラジオへの出演なども行っている。

「高校生会」がこれまでにかかわったプロジェクトには、中国、ネパール、カンボジア、ミャンマーといったアジア地域の小学校や医療施設の建設のための支援をはじめ、最近では、HIV/エイズ撲滅のためのワークショップ「今わたしたちが考えるべきことは？」の開催や、地元の放送局が主催する募金キャンペーンへの参加がある。

普段は毎週金曜日の放課後にAMDAの本部に集まり、「高校生会」の活動計画を検討したり、国際情勢を知るための勉強会をしている。しかし、部活などで忙しい高校生も多く、毎週全員が集まることは難しい。そこで、月に1回、土曜日が日曜日に集会を開き、必要な打合せなどをして、計画がメンバー全員にきちんと伝わるような配慮もなされている。

また、「高校生会」のメンバーが書き込んでいるブログも充実しており、活動報告や支援している国の社会情勢の分析のほか、エスニック料理づくりの体験など、ボランティア活動とおとしての「学び」と「楽しみ」が数多く綴られている。

### ボランティア活動の成果と今後

「高校生会」に代表されるように、ボランティアによる活動は、団体にとって有益であるだけでなく、参加者自身にも多くの学びや成長の機会となっている。

AMDAでは、ボランティアのコーディネートを行う際には、常に団体の活動理念やミッションを理解してもらうことを心がけている。そして、事業の継続性という観点も含め、参加者自身が楽しみながら取り組むことのできるムードを高めていきたいと考えている。

### ボランティアのキーワードは「楽しむ」こと



こいけ あきかず  
小池 彰和 さん  
AMDAボランティアセンター長

私たちの団体は、海外での支援活動が主たる事業ですが、日本国内での災害の際にも支援活動を展開しています。たとえば、新潟県中越地震の時には、岡山県内の老人福祉施設に勤務している介護の専門職のなかからボランティアを募り、被災地での支援活動に参加しました。

メンバーたちは被災地での介護を中心として支援活動に当たりましたが、そうしたメンバーの岡山から被災地までの送迎といった後方支援もすべてボランティアの方々に担っていただきました。

阪神・淡路大震災の際には、地域から延べ約1,000名のボランティアが参加し、現地に入ったAMDAのメンバーのための食事の手配や、メンバーたちが出したゴミの持ち帰りなど、ボランティアを支えるためのボランティアとして力を発揮してくれました。

私自身が考えるボランティアのキーワードは「楽しむ」こと。人のために、あるいは地域社会のために自分自身ができることを無理なく楽しめることにこそ、ボランティアの意義があると思っています。

ボランティアの方々のご協力には、ほんとうに感謝しています。

本稿では、資金・物資・人材など、さまざまな側面から国際協力NGOの活動を国内で支えているボランティア活動について、NGOにとってボランティアとはどのような存在なのか、どのようなかわり方がされているのか、社団法人 シャンティ国際ボランティア会(略称:SVA)の関事務局長にお話をうかがいました。

せき ひさし  
関 尚士 さん  
社団法人 シャンティ国際ボランティア会  
事務局長



かかわり方は多様—双方向性を大切に—

## 窓口は広く・かかわりは深く

国際協力分野の活動に多くの人たちに関心をもっていただき、参加いただくには、多様な志向性や価値をもつ方がたに対応できるよう、多彩なメニューが必要となります。NGOがいかにか、窓口を大きく開くことができるか、が問われるのです。

一方で、関心をもって入って来た人たちにいかに継続的にかかわっていただくことができるようにするか。単なる「興味」「同情」から「共感」さらには「自分ごと」に引き寄せ、次のステップへと進めるようにすることがさらに重要になってきます。

たとえば、災害による被害、環境破壊、貧困・格差の広がり、あるいは地域の絆がうすれたことによる孤立や孤独死など、いろいろな社会的課題は身近な問題であるとともにグローバルな課題です。自分たちの暮らしと世界とは実はいろいろな意味でつながっていることなどに、NGOの活動にかかわることによって、多くの人々が気づききっかけを提供できるのではないかと。そして、そのことに気づいた人たちが、自分の暮らしや生き方、価値観を見直し、変革していくきっかけになっていくのではないかと考えられます。ボランティアもそこから、活動により深くかかわっていくことになるのではないのでしょうか。

## 金銭面での協力・人材としてのかわり

組織にとって、最も心強い支援は資金面からの支援であることはいうまでもありません。NGOの会員となって会費を支払う、指定プログラム、あるいは組織の活動全般に寄付をするなど、直接的な金銭支援のほか、切手やプリペイドカードなど、換金できる物品の寄付も一般化しました。送金方法も、従来のように、銀行などへの振込みのほか、インターネットを通じての寄付プログラムもできるなど、気軽に寄付をしていただける環境をつくる努力もすすんでいます。

人材としてのかわりでは、非常にその幅は広く、事務的なことからの支援や、広報活動への支援、イベントなど事業へのかわりなど、ボランティアの関心事や得意な事などによって、さまざまな参加の方法があります。

多くのNGOが実施している「フェアトレード」や「クラフトエイド」事業にはボランティアが大きく貢献しています。これらの事業は、途上国で女性や貧困層の人たちなどの所得創出プログラムでつくられた工芸品や布製品、あるいは、コーヒー豆などの食品類を直接適正な価格で購入し、通信販売や国際協力ショップ・自然食店などでの委託販売、イベントなどでの出店販売などを行うものです。製品が到着した際の検品、仕分け、袋詰め、ラベルや値札つけ、カタログやポップづくり、ニュースづくり、注文に応じての梱包・発送、あるいは、イベント時の出店準備や現地での販売など、さまざまな作業をボランティアが担当します。

国際協力分野には、近年、若い人たちが多く参加するようになりました。フェアトレードでは、大学生が生協などと組んで実施する事例もありますし、前ページにあるAMDの高校生ボランティア会のような活動、あるいはクラブ活動として国際協力にかかわる学生もいます。

学生や大学を卒業したばかりの人で、国際協力分野で働きたいと考えている人たちが、現地に赴く前に実務的な能力を身につけたり、国際機関等で働くためのキャリアを積むことを目的に、インターンとして働くことを希望する人も増えています。

## 絵本を通じた支援—SVAの主力事業

シャンティ国際ボランティア会(SVA)は、1970年代後半に、ベトナム戦争やカンボジア内戦によって祖国を離れざるを得なかった難民の過酷なキャンプ生活を支援するために曹洞宗の僧侶たちが組織した救済会議を母体に1981年より活動を開始。カンボジア難民キャンプで子どもたちに絵本を配ることから活動を始め、現在は、タイ、カンボジア、ラオス、ミャンマーなどで、図書館活動や、学校建設など、教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができる平和(シャンティ)な社会の実現をはかるため活動を展開しています。また、国内外の大規模災害時の緊急支援も行っています。

SVAの活動経験から生まれたプログラムが、アジアの言語に翻訳した絵本を送り、現地での読み聞かせなど、図書館や学校での教育支援に活用する「絵本を届ける運動」です。

ボランティアは、絵本と訳文をシール化したもののキットをSVAから購入し、日本語の上に現地の言葉のシールを貼る作業をして、できあがったものをまたSVAに送ります。ボランティアへの絵本キットの送付、戻ってきた絵本のチェック、梱包など、貼りこみ前後のさまざまな作業もボランティアの手によります。

シール貼りは、誰にでも、どこでもできることから、自宅で親子で楽しみながら取り組んだり、企業のボランティアグループが昼休みに集まって作業をしたり、労組や生協のグループ活動として行ったり、あるいは学校の総合的な学習の時間で子どもたちが取り組むなど、いろいろな形で展開しています。

たんに絵本をつくるだけではなく、自らの絵本体験を思い出し、絵本が人に与える力に思いをはせる機会にもなります。絵本づくりにとどまらず、親子で絵本を読みあう時間をつくったり、地域での子どもへの読み聞かせ活動につながったり、とボランティアのその後の生き方や活動へのかわり方にも少なからず影響を与えることになります。

年間、約17000冊の絵本がカンボジアなどに送られ、子どもたちが競うように手にしています。その様子は、ニュースレターや年次報告書などにより、ボランティア活動に参加した人たちにフィードバックされます。また「本」を中心とする支援では「チャイルド・ブック・サポーター」という、現地の図書館活動、教員研修、図書出版などの支援に使われる募金活動も行っています。

## 双方向性の学びの場として

国際協力分野に限らず、組織とボランティアとのかわり方は双方向性がとても大切だと考えます。ボランティアとは、一方的に金銭や労力を提供する人ではなく、NGO側もまた、ボランティアのモチベーション・考え方・情報などから多くを学びます。NGOのミッションを達成するために、ともに事業を支えるパートナーとして、時にすれ違いや誤解が生じることがあったとしても、互いの立場や考え方を尊重し、よく議論を重ねながらすすめていくことが大切だと考えています。また、ボランティアには、活動を通じて見聞きしたこと・感じたことを、ぜひ家族・友人・知人など、第三者に伝え・発信していく役割も担っていただきたいと考えています。

**かわり方の例** 国内でNGO等の活動を支えるには、いろいろなかわり方があります。以下はその例です

### 寄付・購入・収集によるかわり

随時送金、NGOなどの会費  
マンスリー・サポーター/プログラム指定寄付  
インターネット募金、外国コイン寄付  
NGO提携クレジットカードの利用  
情報誌定期購読  
フェアトレード製品・クラフトエイド製品等購入/委託販売  
NGOがつくるカレンダーや絵巻書などの購入  
古切手・商品券・プリペイドカード・文庫本などを収集・寄付  
バザー用品の寄贈・購入 など

### 組織運営・事務所の手伝いなど

組織の運営委員・企画委員、編集委員等への就任  
個別事業等の企画・運営支援  
HP更新・ニュースレターの作成等広報活動支援  
書類整理・発送作業・データ入力等事務支援  
イベント準備・要員 など

### 言葉にかかわる支援

翻訳、通訳、日本語教師 など

### 参加することで関心を形に

現地活動報告会  
現地の料理教室・言葉教室・文化教室等  
国際理解教育プログラム・開発教育プログラム等  
NGOが主催する講演会・シンポジウム・セミナー等  
展覧会・写真展・コンサート等、NGOフェスティバル など

注1：マンスリー・サポーター  
毎月定額を、多くは引き落とし方式で、特定のプロジェクト等に寄付

特集

国際協力NGOの活動を支えるボランティア